

国際理解のための教育

加藤 民雄

目次

第一部 国際理解のための教育の概念

第二部 国際理解のための教育のカリキュラム編成の導標

第三部 国際理解のための教育のカリキュラム試案

(其の一) 特設科目「国際理解」のカリキュラム試案

(其の二) 「世界貿易」の教育を通しての国際理解のための教育カリキュラムの試案

第一部 國際理解のための教育の概念

教育の効果は教育せられる個人が如何に変わるかという事によつて測られる。故に國際理解のための教育の實際効果も又個人の目的を如何に發展させ得るかによつて左右される。ここに学習の心理或は習慣變化の心理の原理を応用する必要がある。

学習という事に二つの重要な原則がある。その一つは人間の行動と学習は有機的に働くという事である。即ち人間行動や学習に於て一部分の變化は又他の部分の變化を喚起せずに行われる事はあり得ない。云いかえると人は他の國に對する態度の變化を伴わずしてその國に對する新な知識を獲得するという事はあり得ない。故にもし教育に於て他國に關する知識を増長せしめるといふ事にのみ努力が払われるならば、その副産物たる他國に對する態度はその知識の種類、學習者の性格、又教育の方法等に従つて好ましいものであつたり好ましくないものであつたりする。人は或る一國に關する重要な事實の効果ある學習をすると同時にその國を増惡し或は輕蔑する事をも學ぶ万能性が存在する。例えば戰時中の日本人は米國の生活水準が高い事を教えられ、その故に米國人は戰爭の不自由に耐えられない國民であるに違ひないと見下したが如きである。この故に國際理解のための教育はその様な誤を覆うに足るだけに充分多面的であり、その教育の眞の目的を達成し得る様に広い視野を有するものでなければならぬ。此の原理は自明の理でありながら現在の実際教育に當つては必ずしも実行されているとは云えない。例えば國際理解のための教育と稱され或はその目的を持つ学科の大半は知的理解の點に集中せられていて感情や態度の面に於ては全くと云つてよい程ないがしろにされている現状である。その結果國際理解に關する豊富な知識を持ちながら他國或は他民族に對して同情的理解の能力を全く欠き或は更にその知識を國際偏見の資とする者さえ出現するのである。

第二の重要原則は人間行動の成分を充分に觀察し、目的達成に必要な全領域に渉る教育経験を學習者に与える事である。人間は學習に當つて感受性や態度を獲得すると同様の過程に依つて思考力を獲得する事が出来ない事は心理学上の

衆知の事実である。故に多面的に計画された国際理解のためのプログラムは同時にそれ自体に於てその各面の目的達成に適切な学習経験を含み、その目的の設定は希望せられる人間行動思考の全成分に涉るべく充分に分析的でなければならない、国際的或は世界的發展を学習者に期待するためには次の四方面が目的として含まなければならない。

一、知識、思想、概念——即ち知的覺醒

二、態度、感受性、感覺——即ち感情的覺醒

三、思考力、得られた知識を使用し又それを新しい事態に適應する技術——応用の技術

四、知識、信條、理性を實際行動に移す能力——行動の技術

一、国際理解の知識的な面はあまりにも広範圍に涉るのでそれに必要な全概念、基礎的知識の詳細を記述する事は不可能であるから此所には二、三の一般的な示唆を記するに止める。

一つの文化を中心にして考える時文化は二つの型に分けられる。一つはその文化に類似した内容を持つ文化と、それとは對象的或は異なる文化である。概念的にいくつかの民族或は國家をこの類似する文化に属する一群に入れる事は屢々行われる所である。例えば東洋文化に属する國、西欧文化に属する國という概念がこれである。しかしながら考えてみればこの様な類似文化を持つ國の群はその民族の本質に起因するよりも、歴史的伝統、事件、現在の國際關係、地理的理由に依つてゐる、フィンランド人は元來は東洋人であり、現在もその文化にその痕跡を残していると云われるが、現在彼等の持つ文化は西欧文化の範圍に属するものであらう。この様に文化はその民族の複雑な歴史的背景に依るものであるから人は類似の文化を持つからと云つて同じ群に属する民族を理解し得るとは限らないし又一群中の種々の國際問題に関して客觀的な思考をなし得るとも限らない。此の事は類似の文化を持たない國との間に於てはなおさらの事である。東洋の青年男女の西欧文化に対する知識は今日の世界の出來事を理解するには不充分であり、欧米の青年男女も東洋の諸問題を充分理解し得るだけの知識を持ちあわせていない。此の故に世界史、地理、其他の他民族に関する學習

範圍の選択は次の二つの基準に導かれなければならない。

- (一) 学習者の属する国と重要密接な關係を有する文化或は國家を含むもの
- (二) 学習者の属する国と対象的な或は異つた文化或は國家を含むもの

此の基準に従うと例えば東洋の青少年は少くとも、二、三の東洋文化の國について學ぶと同時に少くとも二、三の西歐文化に立脚する國家について學ぶ事が必要である。此の事は單に國際近親感を深める上に重要であるのみならず自國の文化を客觀的に眺める目を養ひ又良き意味における世界人としての發展にも又必要である。又一つの文化に起る問題でなく全人類に關係ある時事問題に學ぶ事も必要である。現在の世界には單に一國家に關連する問題でなく真に國際的問題が日々起つてゐる。明日の世界市民たる者は全人類の問題、例えば人類の保健に關する問題、貧困に關する問題、或は自由と獨立の問題、其他世界各地に起り、國際的であり、故に又自身の問題でもある事件に目を覺されねばならない。人は如何に遠隔の地に發生した問題であつてもそれが自身に關係あるのみならず自身の問題そのものである事を覺え、引いては世界の他の部分の發展という事に対して切實な關心を呼び起される様に教育されなければならない。ヨハン・ボーヤーの小説「世界の顔」の主人公ハロルドの苦痛こそ世界人の持つ一つの誇でなければならない。この事は人をして世界精神を内に目覺ましめ、人類共存の自覺を持たしめる上に根本的な要素である。この様な精神は個々の國の歴史を教える事や自國の發展にのみ目を向けた教育では決して達成されない。必要な事は此の目的に適切な問題の選択であり、これらの諸問題を形成する複雑な關係及びその解決への充分な探究にある。

人間社会形成の歴史——單純な隔離された小さな單位即ち家族、種族、國家から現在の相互依存の世界的段階への發展——はもし學生に國際關係の諸問題の現實的評價或は將來の國際協力の可能性の現實的概念を与えようとするならば是非とも觸れられなければならない問題の一つである。又人間社会に形成された制度、例えば家族、國家の制度或は公民權の制度の様式と問題も又この目的を達成する上に觸れられねばならぬ問題である。

二、態度、感受性、感覺の領域に於ては教育の目標が自己自身を異れる立場を有する他の人々の立場を理解し、他人の問題を自己の問題とする同情心の助長に向けられねばならない。我々の大部分はその属する文化に縛られている為にその概念や判断に於て民族的であり、そこに所謂人種偏見という問題が起つて来るが、その人種偏見は意識的な或は悪意の有る誤解によつて起るのではなくして単に自分を見る目で他人種を見、他民族の立場に立ち得ないといういわば判断以前の事に依つて起るのである。白人の有色人種に対する偏見はそのよき例である。その大部分は理由や判断を伴わぬ先入的感情によつてゐる。

しかもその偏見即ち感情は或る人に於ては単なる人類学的知識や説明を以てしても取り除く事は出来ない。何故なら正確な知識は常に正当な感情を派生するとは限らないからである。即ちコスモポリタンの感覺はコスモポリタンの世界に生きるに必須のものであるが、それは單なる知識のみに依つては得られるものでない。如何なる一文化もその地方根生を越えて行くためには他の文化に対する事実の知識以上のより基礎的経験を必要とする。感情に触れる経験、価値に對する正しい感覺の育成をなさしめる経験、人間の相異に對する深い洞察の経験が必要であり、國際理解のための教育はこの種の経験をも含むものでなくてはならない。他國への旅行、交通等の直接経験の必要が望ましいのはこのためである。しかしながらこの直接経験をなし得る者の数は限られている。我々はこの様な経験を青年に与える機会を最大限に開いてやると同時に、その機会を得ない者にはそれに代るべき物を与えてやらなければならない。聴視覚教育や古典及び現在の諸外国文学を通しての教育はその一つの優れた途で有り得るであらう。事實に關する充分な知識と鋭敏な感受性の綜合から我々は全人類は同じ權利を持ち、又相互に他の問題を自己の問題として関心を払い同情を寄せ、更に自己自身の主義主張に従つてなお人道を外さないという能力或はそれに対する欲求が生れるのである。

三、客觀的批判的思考力。多くの人間は個人的或は民族的偏見或は先入観を持つてゐる。この様な偏見或は先入観から解放された考え方、又理論の裏付を持つ考え方は第三目的の領域に属す問題である。批判的思考力は永續する國際理解

に絶対に必要なものであるが、それは如何に正確な又特殊な知識の習得も自動的にこの種の考え方に対する技術、能力を与える事は出来ない。のみならず誤れる理論を奉ずる事や与えられた知識を鵜呑にする事は実に感情的な無批判から誘発されるのである。

批判的思考の領域に三つの基礎的な能力の面がある様に思われる。第一には個々の与えられた事実的知識から一般的法則を割り出し、又不完全な個々の知識の総合から一つ概念を創り出す能力がそれである。この様な能力の上に始めて新なる知識を自己の批判の素材とする国際理解に非常に重要な能力が打樹てられるのである。第二は既に獲得された知識或は一般法則を新たな状況に適応させる能力である。国際理解の一局面に於て得られる情報は常に限度がある。何か一つの事件或は問題に関して完全な情報を得る事は不可能である限り人は過去の解釈や分析の経験を以てせずしてはその足らざる部分を補い眞の理解に到達する事は出来ない。今印度に於る天然資源の利用法が如何に印度人民の福祉に係するかを深く探究した者はその経験を以て他の国の場合にも同様に概念を樹て批判をなし得るであらう。この能力は最小の新知識を以て新たな概念を生み出す思考を可能なるものにし、その故に国際理解の如き知識の制限の伴う事に於て特に重要である。第三は批判的理論付の分野である。この事は事実の評価、仮定の判別判定、仮定と見界の識別を含んでいる。批判的態度とは必ずしも皮肉なものである必要はない。それは冷静にして虚疑や煽動にわずらわされないものである。批判的でない。国際問題の事実についての材料或はその概念を構成するに必要な材料の少くとも重大な部分は書籍、雑誌、新聞、映画等から得られるが、この様な国際理解の供給源が実は屢々国際誤解の供給源でもある事実を忘れてはならず又その事を青少年に知らせる事も忘れてはならない。所謂ジャーナリズム程国際理解の味方であると同時に敵であるものはない。何故ならジャーナリズムは屢々大衆に迎合する為に事実を曲げて報導し或は事実の一面に目をつぶるからである。この様な材料供給源に於る宣伝的煽動的傾向が完全に除去され得ない限り、成長する若き世代を概念材料の識別判断能力及び批判的分析能力を付与する事に依つて彼等を保護する事は最も重大な必要となる。現在日本青

少年の新聞雑誌に対する無批判的受入の態度ほど寒心すべき事はない様にさえ思われる。

四、第四の目的は大部分の国際理解の爲の教育及び計画にないがしろにされている共同或は協力の技術を含んでいる。

この技術は最も単純な社会単位——家庭、友人——に於ても屢々最も困難なものである事がある。その事は逆に云えばその様な小単位に於ても訓練し修得し得る技術であると言う事も出来る。教室に於る討論の技術的訓練、異れる幾つかの意見や見界から一つの結論を導き出す技術、思考と行動の共通基盤の発見、討論に於る指導者や各人が討論に参加寄与する技巧等各種のグループ行動の技術が国際理解の教育には含まれなければならない。

第二部 国際理解の教育のためのカリキュラム編成の導標

国際理解の分野は無限と云つてよい程広いのでカリキュラムを計画する者はどの様な問題を選ぶべきか、教えるべき事柄を如何に組織立てるべきかについて何等かの指導なしには迷わざるを得ないであろう。学校教育の現状は既に多過ぎる程の課目によつて満たされて居り、時間的にも余裕は程んど無く、特別の理解と協力なしには新に国際理解のための課目を設ける事は非常に困難である。しかしながら翻つて考えてみるのに国際理解と銘打つた科目の設定は必ずしも必要ではなく、むしろ現在行われつつある課目の国際理解的取扱がなされるならば小、中学校級に於ては所期の目的を達成する事が出来る。勿論可能なる学校に於ては国際理解と銘打つた科目を特設する事は次の世代に於けるその卓越した必要性を考えると望ましい事であり、特に高等学校以上の段階に於てそれは推薦されるべきではあるが、それとも他の諸学課の国際理解的取扱なしには空論と化す危険性がある。云い替れば国際理解のためのプログラムは学校に於ては全科目の協力を必要とし、学校の内外を問わず優れた人的物的資源の協力を必要とし、教室、交友関係、師弟関係、校外活動、家庭、社会を包む学習者の全環境を此の目的のために最も適切なものとする努力が、その社会の全ての人々の理解ある協力によつてなされなければならない。特に低学年に於ては教師の多大の努力が心なき父兄の一言によ

つて崩壊する例は人種偏見の問題等に於て屢々有り得る事である。以上の様な事を念頭に置き又既に時間的余裕の少ない教科目中に国際理解がその地位を確立するためにも、カリキュラム編制者は次の様な原理を導標とする必要がある。

一、青少年が何か特別な問題について考える時、それに関連して価値或は道德に対する何等かの基礎概念を發展せしめる事が必要である。この価値或は道德の基礎概念は人權の問題、即ち全人類は世界中何所に於ても一つの集団としてではなく一個人として取扱われる權利を有している事又その人は他の文化の標準に於てなくその背景とする文化に於ての個人としての価値を認められるべきである事を根底としている。

この事は単純ではあるがその適応は容易ではない。特に日本の如き全体主義の時代を過し、強固な家族制度を有して来た国民に於ては、困難であるが故に一層必要であり、又異なる文化に属する人を理解しその立場を尊重する上に必要である。人權の問題は全ての人に自己發展の方法と機会を与える事を含み、機会均等の問題及び民族的道德的背景の問題をも含んでおり、更にまたそれは何にも増して社会の全員の福祉に資すべく社会及び経済機構の整備の問題を含んでいる。この原理は単に自国内に於て適応されるに止らず他国民に対する態度行動にも適応せられ、国際政策や国際行動に於て特定の国家の利権や特定の国家群の利益のためでなく世界の個人の福祉に対する信念と関連して正しい判断を可能ならしめる。

二、他国民の果した成果と欠乏に関する知識及び他国民の生活の様式と考え方に関する知識は国際理解の知的分野の重大な部分であるが、それは単に知識として与えられるだけでなく、学習者とその従事する仕事との関係に於て補足的に与えられなければならない。異なる民族間に於る「共通」の観念は、全ての国家は解決されなければならぬ共通の問題をもっており、又其の様な問題はいくつかの国の協力によつて解決を早め得る場合がある事を学ぶ事によつて教える事が出来る。又青少年の興味ある問題を他の国に於て起りつつある問題と比較関連して教え、或は他国的立場から生徒の興味を引く問題に触れしめる事に依つても教え得るであらう。

この種の問題は学習者にとつて最も身近い所からとられなければならない。そうする事によつて彼等はその身近な事も又全ての人類と又人類の活動と密接な關係を有して居り、全人類が同じ問題を持つてゐる事、又持ち得る事に対する現実的感覚を持つてあらう。もし学習者の間に食糧問題が切実であるならば日本に於る米の生産方法と中國、ビルマ、印度に於るそれとの比較研究を学習者にさせ、その比較研究を國際關係とその理解の方向に導いて行くのである。全て比較研究は屢々二國間の相異に焦点が置かれ勝であるが國際理解という目標のためにはより以上に二國間の類似にも焦点が合されなければならない事は云うまでもない。かくして全て地理の教育は國々の間の相互依存を強調して教えらるべきであり、現在の國境は自然の境界とは必ずしも一致せず、相互依存による見えざる國々の一群がある事を教えるべきである。かくする事により國家間の近親感、隣接國に限られる事なく遠隔の國家にまで及ぶであらう。ウラン、石油、其他の重要資源は如何に分布し、その故に如何に人類に共有されるべきであるか、そしてその様な問題に附随して起つた種々の時事問題の人間歴史の發展としての取扱は地理と歴史を結びつけ、人類の相互依存或は共存の感覚を呼び覚ますであらう。全て青少年は學校を去る前に自國の境を越えた世界史とその世界史の中にある自國の姿を見、人類の歴史の絶えざる發展と文化の相互透徹について考える機会を与えられるべきである。

三、青少年は全ての文化及び國家が絶えざる發展の途上にある事に目覚めさせられなければならない。この事は變化を受入れる態度を備えしめる上に必要であるのみならず、現在或は過去の一時代の文化に執われずにその後に来た或は来る文化に対する目を開く事を可能にする。例えば中國の人民の大部分は文盲であるとか、オーストラリア人は囚人の子孫であり其の故に犯罪的であるという様な觀念に陷る事を避けしめる事が出来る。文化の變遷發展の歴史を知る者は自國の文化が單に自國の生産したところのものでない事を知り、その歴史的地理的環境の所産である事を覺り、故にもし充分の天然資源と機會と必要が与えられるならば如何なる國も他と同様の達成をなし得る事を知るであらう。然して現存する民族文化の高低はその民族の本質的優劣に起因するものでない事を知るであらう。一般に信ぜられている黒人の人

種の劣等性という様な問題も既に知られている人類科学上の事実を挙げて訂正されなければならない。以上の点を綜合して二国家間の比較は次の二項に沿うものでなければならない。

(一) その二国家の文化内に起つた發展とその二国の地理的歴史的背景を参照として比較する。

(二) 一国の或る面に於る劣等性は他面に於る優越性によつて平均され得る事を理解せしめる。

この態度を創るのには前述の如くある種の歴史的比較が有効である。例えば変遷途上にある二国の比較、自国内に於る同様な文化現象、或は自国と同様な歴史的背景をもつ他国との比較等は青少年に文化変遷發展の原理を知らしめるであらう。

国際共通性を認識せしめる教育は地歴以外の各学科の注意深い取扱によつても行ふ事が出来る。語学、文学、科学はそのよき材料となり青少年をして他国の有する原語、文学、科学の中に自国と共通した文化的宝庫を発見したい欲望を燃え立たせる事が出来る。

四、青少年は国際理解に到着する道が如何に困難なものであるかという事、又安易な楽観主義は悲慘な幻滅に終るといふ事を知らされなければならない。第一次大戦後の国際連盟の失敗はその良き教訓となり得る。又国際理解はなお現在に於てはその初歩の段階にあるに過ぎない事を理解せしめる必要がある。例えば国際連合はその方向への正しい努力の一つではあるがなお多くの問題を含みその修正は一に将来の協力的努力にかかつている事が強調して教えられなければならない。此の事は一地方的事件も世界的人類的目的を以てせずには真に解決する事が出来ない事を教え、人類的世界的權威に対する忠誠への認識を深めしめる事でもある。

しかし国際理解への途の困難と絶えざる發展を認識させる事は單なる国際組織の歴史を教える事のみによつては充分の現実感を味す事は出来ない。むしろ学習者より切実な問題、例えば公民科に於る家族の問題、その村、民族、国家、更に世界への發展の複雑な種々な段階に含まれた困難の分析とその比較研究、また人權の發展の長き苦悩の歴史を学ばし

める事は青少年に次の世代を担う者としての自覚を与え、少しでも先人の業に加える所を期す現実的積極的道德的な發展に導くものである。

五、国際組織、例えば国連、赤十字社等について教える時にはその自国との関連に於て教える事が必要である。その事にかかる国際組織の目的とする所の成否が実は自国の協力の如何に懸つてゐる事を自覚させるからである。国際組織その物についての教育は学習者の現生活に關係なき空論的印象を与え、又自国内に於るそれらの組織にのみ集中された教育はその組織の全人類の本質を理解させる事が出来ない。又国際法に関する知識は国内法との関連に於て始めてより親み深い効果を挙げる事が出来る。

六、国際理解を教育するに當つては問題は多角度より考察されなければならない。一方的觀察は国際不理解或は誤解の因である。現在学校で行われている学課制はこの注意が払われない限り国際理解の障害となる可能性がある。このため実際上の取扱方としては世界地理或は世界歴史に關連して一つの基本問題を取り上げ、それを理由、事実の結果、影響等の各方面に於て種々の異なる立場からの觀察批判がある。又この事は単にそれ等の基本問題の考察方法に止らず、あらゆる国際現象に對してその様な考察をする習慣にまで導くべきである。青少年はこの様な習慣を身につける事によつて先に述べた如きジャーナリズムの偏れる宣伝から自身を守り得るであらう。

七、国際理解のための教育のプログラムは全ての面に均衡ある興味を備えられなければならない。興味は学習欲を刺戟し又自ら活動する欲望を起させる。もし食欲が万国人の共通する重大な興味であるならば家庭科の料理の時間に各国の料理法を教授する事から国際理解に發展して行く事も出来る。此の場合それは各国の地理的環境、文化的環境、歴史的背景等の関連に於て教授されねばならない事はいうまでもない。更に「均衡ある」興味とは

- (一) 青少年をして自己の属する以外の文化に對しても目を拡張しめ、民族的見界や民族的宗教政治を越えて考える事を可能にする。
- (二) 單なる知識の吸収に終始せしめず何等かの實際活動に加わらしめて国際理解を深めるに必要な技術を現実感の上に發展せしめ

る。外国児童との作品の交換、或は困難な状態にある外国の学校に対する援助、更に出来れば教授や留學生の交換等によつて生徒は自分が活動の一駒として現実に働いている事を知る。

(三) 更に青少年をして自己と異なる地の人々が実は人間として同じである事を知らせる様な何等かの経験を与える。海外ペンパルの紹介等はこの目的に沿うものの一つであらう。

八、国際理解の初歩の心理的段階は青少年の日常の交友関係の中に始る。この事は、他人の習慣や仕事に対する知識によるよりは、むしろ忍耐、理解、友情等の特性が自然に発露される社交生活によつて体得されるものであるから、生徒相互の交りの内に理解が活かされる様に導かなければならない。又教師と生徒の交りは地位の優劣性の觀念から全く解き放された、お互を尊敬し合う理解の原則の模範でなければならぬ。多くの交りに於る理解を生む要素の内で自己統御の実行と研究はあらゆる機会を把えて教えられなければならない。生徒或は教師も参加しての共同研究や討論はこの目的のために有効である。同時に学校を離れてからもこの態度と関心を続けさせるために国際理解に寄与する諸団体への参加の奨励にも力が儘くされねばならない。

九、国際理解のための初歩的行動段階は、他の人々に対して先入観を抱く事(例えば守銭奴のユダヤ人、好戰的日本人等)を除く自己批判と又自身の属する社会に於る他人との関係の注意深い研究にある。その属する小さい社会に於て他を容れる事を学んだ青少年はそれを他国民に対しても反映させるであらうし、自分の社会に属する個々の隣人を広い心で自分と同じ人間として扱う事はそのまま国際関係に起る事件に対する正しい態度でもある。自己批判の本質的な部分は知的技術を用いての明確な考察にある。青少年に於てはある生の材料を用いてその材料に基く一般概念、規定に到着するという様な練習によつてこの技術は習得せられる。この様な訓練は学年の進むにつれて高度化する事が出来、与えられた材料の鵜呑めではなく批判的態度をとる事が習慣となる様な方向に導かれねばならぬ。然してその批判は他に対すると同時に自己にも向けられる様に導いて行く事が出来る筈である。

十、國際理解のための教育は同じ材料もそれを行う個々の国の特殊事情や国状に応じて異つた取扱が必要である。その最も著しい例は他国によつて統治せられている国である。統治国に於ては育生せられやすい優越感情を押えて人間性に対する対等の或は尊敬の感覺助成に努めなければならないし、一方被統治国に於ては自覺とそれから生れる自己尊敬の精神の助成によつて、感ぜられ勝ちな劣等感、苦痛、忍従圧力感情を除却する教育的取扱が必要である。後者は特に永年の間に涉つて独立のために斗つて来たり或はやつと独立を克ち得た若き国家の青年の間に見られて、彼等をして国家的な態度見地から飛躍して國際的態度見界への進展を困難ならしめているからである。

以上の導標には重複する点も多いが結論として(一)國際理解のための教育目標の確立(二)國際理解の必要を実感せしめる(三)國際理解に対する或る程度の理論的概念を与える(四)日々の生活の中に於る練習と実行をなさしめる。以上の四つを挙げる事が出来る。

第三部 國際理解のための教育のカリキュラム試案

實際に中学校又は高等学校に於て國際理解のための教育を実施せんとするに當つては、カリキュラム編制上に三つの方法がある。その一つは全くこの目的のために特設せられた、「國際理解」と銘打つた科目を持つ方法と、現在既に実施せられている諸學課を國際理解という光の下に取扱う方法、及びこの二者を併用する方法である。國際理解という科目を新設する事には支持と同時に多くの反対が予想され得る。その反対の理由は主として次の様なものである。(一)現在に於てすら多すぎる学科数に更に追加する事は實際上困難である。もし強いて設けるなら課外活動の分野に入れて希望する生徒の選択にまかせればよい。(二)この特設科目は大会の学校では人的資源の活用によつて比較的容易に行い得るとしても、小都市或は辺地の学校ではその様な資源が得られない。(三)人的資源或は物的資源を充分に活用したり見學旅行をするためには多額の経費を必要とする。(四)一科目のために多人数の教師を必要として既存の学科の教程に混

乱を来すおそれがある。(四)国際理解という様な事は単に一科目をその目的のために特設するという様な事では眞の目的は達せられない。以上の様な理由は夫々耳を傾ける価値があり、事実学校プログラムの編成、又その経済面、学校の存在する位置等から充分の研究が事前に行われなければならないが、いずれももし当局に、この教育目的とその必要の重大性に対する深い理解、誠意、積極的援助があるならば必ずしも絶対的な理由となるものではない。ただ第五の理由はより積極的な解決を必要とする。正に国際理解は一学科を通して教えられる様なものではなく生徒の全生活を通してこそ始めて教え得るものである。もし此の学科に対する他の諸学科の協力がなければ、国際理解は生徒の学校生活のほんの一部分の問題に過ぎなくなるであらう。反対にもし他の諸学科が世界平和のために夫々国際理解の必要を念頭に置き、その考えの下に各学科の取扱方を研究し此の学科に協力するならば、学校生活の大部分を通して生徒にこれを教育する事が出来る。しかしながら学校教育は生徒の生活の全てではない。生徒の全生活をこの光の下に置くためには、生徒相互の協力、学校の全面的協力、生徒の家庭の協力、更に生徒と学校の属する社会の協力が必要である。この協力によつて始めて生徒は知情意と行動の全面からこの教育目的達成に進み得る善き環境を持ち得るであらう。

以上の様な点を考慮すると国際理解のためのカリキュラムの編成は全学科の広範囲に及び、今その全部を記述する事は不可能である。故に此所では一、「国際理解」と銘打つた一つの科目のカリキュラム一試案と、二、他の学科を使つての国際理解的取扱方の一試案を掲げるに止める。

(其の一) 特設科目「国際理解」のカリキュラム試案

このカリキュラムは神戸女学院高等学校部三年生の社会科の一コースとして実施する想定のもとに編成した。神戸女学院はそのミッション・スクールとしての特異な性格上、又阪神間に位置しているという学校の地理的性格上、この種の科目を設ける事に特別の意味と便宜があるが、もし他校に於て実施すると想定した場合にも内容の多少の改変によつて所期の目的を達する事が出来る筈である。高等学校三年生を実施学年として想定したのは、此の学年に於ては生徒は一

応の基礎学科を既に修めており、国際理解という複雑な問題に対しても自主性ある研究をなし得る事、思想的にもこの種の問題を自己の問題として総合的に把握し得る段階に達している事、討論其他教室の外内に於る学修に必要な技術にも或る程度満足な結果を期待し得る事、及び此のクラスによつて得られるであろう知識、技術、感情を綜合して国際理解のための自発的行動に進み得る段階に達していると思われるからである。又生徒の中には此の学年を最後に学校生活を終つて実社会に入つて行く者がある事を考えて、その前にこの様な問題に触れ考える機会を与えたいという希望からでもある。

以上の事は決して国際理解のための教育がその年齢に達するまで行われ得ないとか、ないがしろにされてよいとかいう事を意味するのではない。反対にこの特設科目がその目的を達成するためには、その時までこの様な問題に対する興味とその必要性に対する感覚とを生徒の内に養つておかねばならないから、国際理解のための教育は学校教育の最も低学年に始められ、常に続けて実施されなければならない。全校の国際理解日という様な日を定め（例えば国連記念日に）全学年を通じての興味をこの方向に向け国際理解への関心を高める事はそのためへの一つの途であらう。

一、このコースに於て強調せらるべき点

一、「一つの世界」の觀念。

二、国際誤解の原理。

三、国際理解の障害となる問題。

四、国際理解への試み。

五、国際理解に於る日本の責任。

二、このコースの目的

(一) 生徒の技術及び習慣の面の発展

- (1) 既にある国際理解のための組織或はそれに関係ある組織（例えば Y M C A、Y W C A、ユネスコ協会、アメリカ図書館、其他国際的學生組織等）を利用する技術と能力。
- (2) 外国映画、雜誌、其他による文化の誤解を避け正しい批判解釈をなし得る能力。
- (3) 国際問題に対する自主性ある判断能力。
- (4) 民主々義的運行に対する技術的訓練。

(二) 知識及び理解の面の発展。

- (1) 個人として又國民として世界平和に寄与することの必要性の理解。
- (2) 他國の文化を理解する知識。
- (3) 国際理解のための組織に関する知識。
- (4) 国際問題の知識。

(三) 感情及び態度の面の発展。

- (1) 「世界家族」の感覺、隣人愛の感覺。
- (2) 民族的國家的優劣等感の除去。
- (3) 世界平和に対する熱情の醸生。
- (4) 国際問題に対する近親感の發達。

(四) 行 動 面

- (1) 良き交友關係の助成。
- (2) 隣人愛及び奉仕の実踐。

(3) 留学生、ペンパル、在日外人等を通じての国際親善活動への奨励。

(4) 国際親善にあずかる国際組織への加入と活動の奨励。

(5) 自己の属する社会内に於ての世界平和への貢献の奨励。

三、授業細目

（一）一つの世界

1. 全ての国は経済的に相互に依存している。

イ、日本は外国に依存している（講義）。

ロ、或る外国は日本に依存している（講義）。

ハ、討論と質問

(1) 世界貿易とは何か。何故必要か。

(2) 国際貿易の技術。

(3) 世界貿易を助成するために過去に何がなされたか。

(4) 世界貿易を助成するために現在何がなされているか。

(5) 米国は日本及び他の国にどんな援助を与えたか。何故か。

(6) 米国以外の国で他国に同様な援助を与えている国があるか。何故か。

(7) マーシャル・プラン、ポイント・フォアーとは何か。

(8) 貿易に於て二つの世界は可能か。

ニ、摘要と講演（経済或は外国貿易専門家による）

2. 全ての国は他国の文化に利益を受けている。

イ、西欧文化の日本文化への影響（講義と討論）。

ロ、東洋大陸文化の日本文化への影響（講義と討論）。

ハ、日本の外国文化への影響（講義と討論）。

- (1) アジア諸国の独立と日本の与えた影響。
- (2) 科学界に於る日本の業績と貢献。
- (3) 外国芸術に及ぼした日本芸術の影響、貢献。
- (4) 日本工業の世界に占める地位。
- (5) 日本人の移民。

二、討 論

- (1) 西欧文化はどの様に日本に影響したか。
- (2) 西欧文化が日本に來なければ日本はどうなつたであろう。
- (3) 西欧文化が我々の日常生活に与える利益。
- (4) 西欧文化が日本に与えた損失はあるか。
- (5) 外国文化に対する我々の態度はどうあるべきか。
- (6) 国際間に善意を創造するために芸術は何をなし得るか。
- (7) 日本人は日本文化を他の文化に比較して誇り得るか。
- (8) 日本文化の特色とその良さは何か。
- (9) 日本文化は外国文化にどんな影響を与えたか。
- (10) 日本が世界の信用と尊敬を克ち得るために我々は何をなすべきか。

- (11) 日本人は朝鮮、満州、中国、ブラジル、南洋で何をしたか。その善悪両面について。
(12) 西欧文化のよさと東洋文化のよさの両方を併せ持つ事は可能か、どうすればいいか。
3. 全ての国は思想的に共通性をもつ

イ、宗教、哲学、諸種のイデオロギーにつき常識程度の説明をし、質疑応答を行う。

(1) 仏教、神道、基督教、回教、其他。

(2) 共産主義、民主主義、ファシズム、帝国主義、人道主義等。

(3) 理想主義哲学、自然主義哲学、リアリズム哲学、実用主義哲学等。

ロ、精神的思想的結合の必要（講義）

(1) 近代戦争の惨禍

(2) 破壊或は戦争目的に用いられる資源の建設或は平和目的への転換。

(3) 冷い戦争の影響。

ハ、討 論

(1) 各宗教の共通性。

(2) 仏教の日本文化への影響。

(3) 日本は基督教を必要とするか。

(4) 冷い戦争とは何か。一つの世界をもたらす可能性はあるか。

(5) イデオロギーの異つた国は共存出来ないか。

(二) 国際誤解の原理

1. 先入観はどんな風にして入つて来るか（講義と討論）。

2. 文化、習慣等の誤解（講義と討論）

イ、旅行者の印象、物語、行動から来る誤解。

ロ、書籍、映画等の誤まれる解釈から来る誤解。

ハ、他人を完全に理解する事の本質的困難、理解する事に必然的に伴ふ誤解。

ニ、貿易競争に原因する諸種の誤解。

ホ、少数者を見て全体を推測する事（特殊の一般化）に起因する誤解。

ヘ、例外のない規則はないという事を忘れる事に起因する誤解。

3. 講演「アメリカ映画の見方」

4. 討 論

イ、国際誤解の原因は何か。

ロ、外国映画を国際理解の立場からどう見るべきか。

ハ、ハリウッド製の映画はアメリカの生活を代表しているか。

ニ、国際誤解はどうして除去し得るか。

ホ、国際誤解除去のために我々は何をなし得るか。

（三） 国際理解の障害となる問題

1. 人種偏見の問題

イ、米国に於る黒人に対する偏見の実際。過去十年間の進歩を説明する。

ロ、アメリカの生んだニグロ偉人（ブーカー・ワシントン、パンチ博士等）の業績を生徒に調べさせる。

ハ、人種偏見の原因は何かを生徒に考えさせる。

ニ、人種偏見の改善の途を生徒に考えさせる。
ホ、人類学上から見た人種的能力比較はどうか。

へ、討 論

2.

- (1) なぜ人種偏見が起るか。
 - (2) どうすれば人種偏見を除去し得るか。
 - (3) ナチス・ドイツのユダヤ人迫害、アメリカ合州国に於る黒人問題をどう思うか。
 - (4) 日本に於る少数民族に対する偏見の実態とその除去の方法。
 - (5) 高関税政策、通商禁止政策に起因する国除誤解について。
- 国家主義と国際主義

- (1) 排他的愛国主義と国際主義について説明。
- (2) 世界聯邦運動について説明。
- (3) 人間である事と日本人である事はいずれが第一義的であると思うか。両者は常に両立しないか。両立させるためには日本はどうならなければならないか。について考えさせる(討論、作文、宿題等による)。

ト、言語の障壁

- (1) 言語の国際理解に与える障害は何か(討論)。
- (2) 国際語は必要か。それは既存の一国語を以てすべきか、エスペラント語の如きものであるべきか(討論)。
- (3) 日本語の簡略化は何故必要か(質問)。
- (4) 日本に於る外国語教育はもつとどうあらねばならないと思うか(質問)。
- (5) 音楽は世界共通の言語と云われる意味は何か。

(6) 国語廃止論をどう思うか（討論）。

(四) 国際理解への試み

1. 国際連盟と国際連合の歴史、組織、主なる相異等の大略の説明。
2. ユネスコについて（講義）
3. 国際組織を持つ団体の何れかについて生徒一人一人に調べさせその活動を報告させる。（YMCA、YWCA、赤十字社、救世軍、キリスト教宣教会社、国際労働組織、其他。）
4. 日本切手で海外に郵便物が出せるか。
日本の切手で海外から日本に郵便物が出せるか。日本の航空用手紙は海外から日本に出せるが何故か。
5. 国際基督教大学とは何か（同校より講師を招く）。
6. 最近開催された国際会議中教育に関係あるものを選んで生徒にその研究報告をさせる。

7. 討論

- (イ) 日本は国連の一員となる必要があるか。
- (ロ) 各種国際団体はどの様な面で国際理解に貢献して来たか。
- (ハ) 何故国連は一九五〇年六月朝鮮に派兵したか。
- (ニ) 国連の困難の重大原因は現在どこにあるか。
- (ホ) 世界聯邦政府は世界平和への解答であり得るか。
- (ヘ) 日本が国連に加わる時、日本の国連に対する貢献は何か。

8. 人的交流

1. 技術、教育、労働其他に於る人的交流の必要と現在行われている活動についての説明。

ロ、質 問

- (1) 何故人的交流は必要か。
- (2) 人的交流を更に発展させるには何が必要か、何が改善されなければならないか。
- (3) 日本人の海外留學生の現状はどうか。
- (4) フルブライト交換教授及學生とは何か。

(五) 国際理解に於る日本の責任

1. 国際理解に於る日本の貢献はどうして出来るか(討論)。
2. その障害は何か(討論)。
3. その障害克服の途はあるか(討論)。
4. 個人として各自はのために何をなし得るか(討論)。

(六) 綜合活動

1. 定められた国際理解日(例えば国連記念日)にこのコースから得られた生徒の作品、研究、図表等の陳列。
 2. 生徒のより進んだ研究及び活動の指導と奨励、ペンパルの紹介、外国の二、三の学校との生徒作品の交換等。
- 四、「国際理解日」の構想

特定の日例えば国連記念日或は文化の日を選んで全校の催しとして国際理解日を持ち、次の様な活動をなす。

1. 国際理解のための資料の陳列展示。
2. 国際理解のための音楽会、劇、映画会等の開催。
3. 国際理解のための講演(例えばノーベル賞について、国連について、或は外国人による講演)
4. 運動場に於て各国のフォーク・ダンス、スポーツ等の開催。

5. 各国の代表的料理の売店を催す。

6. 外国の学校との間に交換した作品の展示。

7. 其他生徒の国際理解への興味と熱情を刺激すると思われる各種の催。

五、此の科目の効果の評価

一、筆答試験

二、リポートの提出

三、教室に於る活動状態の観察

四、校内、校外に於る生徒の活動状態の観察

(其の二「世界貿易」の教育を通しての国際理解教育カリキュラムの試案

前項に述べた通り国際理解のための教育の実施に当つては、カリキュラム試案其の一に掲げた様な「国際理解」と銘打つたコースの設定についての異論もあり得るし、又例え設定され得たとしても他の諸学課の協力なしにはその目的は達成されない。そこに他学課の国際理解的取扱の方法が問題となる。

ここに試案の其の二として掲げるものは、その取扱方に対する一つの示唆であつて、一つの参考資料として批判の対象になれば幸である。実施は高等学校三年生を一応の目標としているが、内容の取扱方によつてある程度の変更が可能である。但し内容は非常に専門的な分野に渉る部分があるが原則としては純粋理論の立場から教え、実除上の複雑な手続其他の部分は適宜これを省略するか或はその途の權威の助力によつて説明されなければならない。

なおこの試案は米国アイオワ州立大学の一九五二―五三年度の「国際理解のための教育セミナー」に於て筆者を含む十九人の学生(米人九、印度とカナダ夫々二、英、独、仏、韓国、トルコ、日本夫々一)の学生による共同研究を基礎としたものである事を断つておく。因にそのセミナーのインストラクターは同大学ピーターソン教育学部長、同学部

テバーツ教授、及び英国スコットランドのダンディー大学よりの客分教授スキナー博士の三人であつた。内容及び用語についてはチェイス・マンハッタン銀行大阪支店総務土井建二氏の助言に負う所の大きい事を附記して感謝の意を表す。

何故世界貿易が必要であるか

基礎段階

一、世界貿易に関する教育用映画の鑑賞

二、最初のクラスに生徒に新聞、雑誌の類を持つて来させ、その中にある外国製品の広告を発見させる。

三、クラス全員にその日の朝（昼、夕）食の献立の明細を書かせ、料理に用いられた材料（砂糖等を含めて）の内輸入された品に傍線を引かせる。次に何故その様な品が日本に輸入されるかの理由を箇条書にさせる。

四、生徒の家庭で使用する輸入品を書き出させる。我々はそれらの品を日本で生産出来ないか。たとえコストが高くついても我々の必要とする全ての物を日本で生産する方が良くはないか。この事の中にどの様な経済原理が含まれているか。

五、近くに貿易港があれば其所を見学する。外国旗を掲げる船のリストを作らせ、又税関を訪れてその港から輸出入する物品名リストを作らせる。教室に帰つてリストの整理。黒板或は壁に整理したリストを掲げ、同時に外国の国旗についても教える。

六、宿題（個々の生徒或はグループに分けて）

（一）何故外国貿易が必要か。

（二）貿易のバランスとは何か。貿易取引と貿易外取引の貿易のバランスに於る関連性は何か。

（三）ナチス・ドイツは自給自足を試みた。日本も戦争中これを試みた。それは如何にして行われ、如何に国民の生活

水準を引下げたか。

- (四) 世界の地理的労働力の配分とは何の事か。世界地図を描かせ。(イ)日本に食糧を輸出する国。(ロ)工業原料を輸出する国を色分けさせる。

発展段階

- 一、宿題の提出、その内容についての発表と討論。
- 二、主要な日本の貿易相手国を輸出入について夫々十あげさせる。
- 三、主要輸出入物品を夫々十あげさせる。
- 四、或る一国をあげてその国との貿易品名のリストを製作。
- 五、入手出来る最近の資料に依つて一年間の日本の輸出入額を円で出しグラフにする。
- 六、百貨店或はこれに類似するものを尋ね陳列されている輸入品のリストを作らせる。質問、(一)輸入品は国産品に比して品質が上であるか、(二)輸入品の値段は国産品に比して高いか安い。その理由は、(三)何故その百貨店は国産品のみを売らないのか。

結論段階

一、次の話題によつて生徒の坐談討論

- (一) 貿易外取引の重要性。
- (二) どの国も完全に自給自足出来ないという事。
- (三) 日本の関税が如何に我々の生活費を高めるか。
- (四) 強力な生産国家は貿易上優位な地位を占める事が出来る。
- (五) 地理的環境と生活水準の問題。

二、次の話題に関する専門家の講演

(一) 何故外国貿易が必要か（其筋の権威）。

(二) 税関の仕事（税関吏による）。

(三) 商工会議所は外国貿易のために何をしているか（商工会議所の派遣者による）。

三、税関の見学

国際貿易の技術

基礎段階

一、大きな商業銀行を訪問して国際貿易に使用せられる信用状の用法を聞き、外国為替レートについて聞く。

二、一部の生徒を外国汽船或は旅客航空機会社に行かせて海外旅行の手続についての話を聞いて来させる。

三、輸入業者を尋ねて商品を見せてもらい、それをどうして支払ったかについて聞く。

四、宿題

(一) 比較生産費の原理が輸入品の値段を如何に決定するか。

(二) 何円が一弗に相当するか。戦前なぜそれが毎日変つたか。何故現在一応不変であるのか。ドルの間はなぜ起るか。

(三) 金の輸出禁止とは何か。又何故か。その外国貿易への影響。

(四) もし英国に大金脈が発見されれば英国の世界貿易に於る地位に影響があるか。

(五) もし生徒が輸入業者で三百六十万円を持つているとし、米国の鉄を輸入したいとする。基本理論とその手続はどうすればいいか。現在なぜそれが簡単に出来ないか。

発展段階

一、宿題についての発表と討論

二、弗と磅の、レートとその過去二週間の變化について調べさせる。

三、なぜ米國弗が日本を含む世界の国々で必要とされるのか。

四、純理論的立場で図表による外國貿易處理の説明。

結論 段階

一、クラスを二分して外國貿易に必要な用語或は定義の質問合戦。

二、「現在の我が國の外國貿易がよつて立つ基礎は何か」を主題とするパネル・ディスカッション。

三、信用狀、其の他貿易用商業書類の展示による外國為替銀行家の講演。

四、此のユニットの摘要を纏めさせる。

世界不況の前に世界貿易に何が起つたか

基礎 段階

一、世界不況についての説明。

二、貿易に於る民間自由貿易と政府統制貿易の斗争についての説明。

(一) 政府による貿易統制

(二) 自由貿易

(三) 高關稅政策(四)國際外交の貿易に対する影響。

(五) 放任主義による世界貿易の刺戟とその困難性。

二、宿題

(一) 貿易統制とは何か。

(一) 貿易統制の日本經濟に及した影響。

(二) 十九世紀に於る放任主義貿易の刺戟と失敗。

(四) 世界不況前の米國高關稅政策はその國內産業にどの様な影響を与えたか。

(五) 日本は債權國であるか債務國であるか。債權國はどんな國があるか。

發展段階

一、提出された宿題に関する討論。

二、世界不況の時に貿易商であつたとしたらどんな困難を味つたであらうか。

三、モンロー主義が英米間の貿易に与えた影響はどうであつたか。

四、世界貿易史上主導權を握つていた國々の変遷の歴史とその理由。貿易の方法はどの様に変化して來たか。それ等の國々には如何に自國の繁榮に貿易を以て寄与したか。

五、第一次及第二次世界大戰に貿易制限の与えた影響。

六、漫画を以て輸入稅引上による外國貿易の影響を生徒に分らせる。

結論段階

一、「貿易に対する日本の内外からの制約が日本の太平洋戰爭突入に与えた影響について」パネル・ディスカッション。

二、外國貿易に従事する人による輸入稅の貿易に与える影響についての講演。

三、日本に於る貿易統制は日本人に利益をもたらしたか。

四、過去五十年間に於る世界貿易は二つの世界大戰の發生に対して責任を負うべきであると考えるか。世界貿易を育てるために何がなされつつあるか。

世界貿易を育てるために何がなされつつあるか

基礎段階

一、次の諸点に於る討論

(一) 自国生産が自国原料によつてまかなえる国ではもし失業者が増加したら、輸入の減少を計る事は得策であるか。
現在の日本ではどうであるか。

(二) 磅の切下後米国市場に於る英国製品の値段が下つた。何故か。

(三) 日本の機械製造業者は独乙の機械の輸入に反対すべきであると思ふか。

二、生徒の両親又は年長者に世界不況の時の日本の經濟生活状態について質問させる。当時米国はどんな手を打つたか。

三、宿題

此の項に得られた知識を複習し、第一次大戦後各国に於る世界貿易のための努力を調べ、又第二次大戦發生に導いた世界貿易の要素を調査させる。もし貿易が戦争を導入したならば、それ又は世界平和を導く力たり得るだろうか。

四、質問

(一) 関税は国民生活にどんな影響をもたらすか。

(二) 一国の繁栄はどの様に輸出入にかかつて来るか。

(三) 世界に於るドル不足とは何を意味するか。何故それが米国以外の国民にとつて重大問題であるか。その解決の可能性は。

(四) 一国を選んで過去十年間に於る通商協定の歴史の概略。

(五) 貿易に於るカルテルとは何か。各国政府のカルテルに対する態度はどうか。

(六) 自由貿易は計画貿易や弱い工業を育成する事と矛盾するか。何故か。
発展段階

一、宿題の討論

二、世界地図の上で日本と通商条約を交している国を示す。

三、グループ研究を次の二問題のいずれかについて行わしめる。

(一) 世界平和のために世界貿易を用うるにはどうすべきか。

(二) ドル不足を克服するにはどうすればいいか。

結論段階

一、外国貿易と国家繁栄の関係を示すグラフの製作。

二、通商協定に到る順序を一連の漫画に描かせる。

三、次の二問題の一つについてのパネル・ディスカッションを持たせる。

(一) 自由貿易は現段階に於て可能か。

(二) 自由貿易と国内計画経済を両立させ得るか。

国際連合は如何に世界貿易に貢献し得るか

基礎段階

一、次の質問を用いての問題の提供。

(一) 何時、何故、国連はつくられたか。

(二) その組織は。

(三) 国連の如何なる部分が世界貿易と直接の關係を持つっているか。

二、アメリカンライブラリー等にある国連に関するフィルムを鑑賞しその印象について語らせる。もし国連本部を訪れた事のある人が有ればその建物仕事等についての印象を話してもらう。国連加入準備委員会から資料や人を得る事が出来る。

三、国連及びユネスコに関する知識を新聞雑誌に現れた最近の記事の見出しを持つて来させて説明。

三、宿題

(一) 国連の組織を図解。

(二) 国連各部の仕事の略述。その内直接貿易に関係あるのはどれか。

発展段階

一、宿題の討論。

二、三つの主なる経済的需要（物、貿易、職業）とそれを満す段階についての討論。

三、新聞に現れる国連と世界貿易に関する記事の切抜帖をつくらせる。クラスで報告させる。

四、世界貿易、国連についての講演、映画

五、世界貿易の議せられた会議についての研究、

結論段階

一、国際貿易事務所とは何か。その活動についてクラスで報告を行わせる。

二、生徒の読んだ本や文献の報告。

三、特に興味を示した生徒に対しては研究資料を与え、研究を纏めさせる。

四、作文或は詩の形で世界貿易の理念を表現させる。

マーシャル・プラン

基礎 段階

一、教師又は生徒による第二次大戦後の英、仏、蘭或は欧州の短い説明の後その生活状態と当時の米国の生活状態の比較をする。次で次の二点を生徒が行う。

(一) 当時のヨーロッパに於る生活状態の悪さについてのリストを製作し如何にヨーロッパが援助を必要としたか、又どの様な援助を必要としたかを示させる。同時に自尊心を持つ人々が慈悲を受ける事を好まない点に注意を与える。

(二) マーシャル・プランが如何に行われたか又その意図したところを研究する。

二、マーシャル・プランに関する映画(アメリカン・カルチュアル・センタ―に備えられている)を鑑賞させる。

三、新聞に現れたマーシャル・プランに関する記事を集めさせ必要な単語の説明をする。

四、宿題

(一) 何故ヨーロッパは援助を必要とするか。

(二) 何故米国が援助しなければならないか。

(三) ヨーロッパはどんな援助を必要とするか。

(四) 米国はそれに対し何をしたか。

五、右の宿題のための資料を教える。

六、問題の分析とその研究

(一) マーシャル・プランとは何か。どの様に働くか。

(二) どの様にそれは世界貿易に影響を与えたか。

(三) どの様に西欧の再建に貢献しているか。

四 何故東欧はその計画を受入れないか。

(四) この計画により米国はどのような利益を受けるか。

(六) その影響する所は単に経済的であるか。

結論 段階

一、生徒にマーシャル・プランに関する資料を集めさせ理解させる。

二、リポートの提出。

三、クラス内に対立する意見の整理。

四、西欧の生活水準の、プラン実施前後の比較。

五、マーシャル・プランに関する専門家の講演と質疑応答

ポイント・フォー

基礎 段階

一、ポイント・フォーとは何か。

二、何故ある国は富みある国は貧乏であるか。

三、世界地図を用い近代文化的に未開発な地方を示す。

四、宿題

(一) 何故ポイント・フォーが必要か。

(二) どの国がこの計画を受けているか。

(三) どのような組織に援助が与えられたか。

(四) 国連は近代文化的に未開発の地方にどんな援助を与えているか。

(五) 米国はこの計画をまかない得るか。

(六) この計画の下にどのような事が既に行われたか。

発展段階

一、ポイント・フォーは世界貿易とどんな関係があるか。

二、ポイント・フォーは世界平和にどんな関係があるか。

三、講演、質疑応答。

ソ聯の行つた援助

基礎段階

一、ソ聯はどの国にどのような援助を行つているか。

二、中共はソ聯の援助によりどのような発展をしたか。

三、何故ソ聯は中共を援助するか。

四、日本と中共の貿易はどうなつているか。又今後どうなる事が望ましいか。

五、もし日本と中共との貿易がもつと広く行われるなら貿易の物品はどんなものになるか。

発展段階

一、日本は何故中共と貿易せねばならぬか。

二、中共はそれを望んでいるか。

三、日ソ関係が中共貿易にどんな制約を与えているか。

四、日本と中共の貿易に関する新聞記事の切抜と説明。

五、日米関係が中共貿易にどんな制約を与えているか。

結論 段階

一、日本と中共の貿易を困難ならしめている国際状況について。

二、貿易は人的又思想的な交流を伴うか。中共からの輸入は共產主義の輸入を同時に意味するか。

三、イデオロギーの異なる国の間にもスムーズな貿易は有り得るか。

四、中共を最近観察した人の印象談と質疑応答。

世界貿易に二つの世界は可能か

基礎 段階

一、クラスに於る討論

(一) 「二つの世界」とは何を意味するか。

(二) 「二つの世界」の夫々にはどんな国が属するか。

(三) 「二つの世界」に於る相異と共通点。

二、「二つの世界」に関する新聞の切抜帖の製作、特に貿易に関して。

三、宿題

(一) 世界貿易を可能とする根本基礎とは何か。

(二) 資本主義と共產主義の経済理論の相異がどの様に世界貿易を妨げるか。

(三) 資本主義国家と共產主義国家の間に現在どの様な貿易が行われつつあるか。

(四) 何故それはもつと進展しないのか。

発展 段階

一、宿題に関する討論

二、世界地図の上に二つの世界の色別をさせる。

結論 段階

一、充分資格ありと判断せられる人による講演と講演者を囲む質疑応答、講演者に導かれる討論を行う。

二、「国際理解と世界貿易」の題の下に学年リポートの提出。

参考文献

1. 主として第一部、第二部及び第三部（其の一）のためのもの
Adam, Thomas R. *Education for International Understanding*. New York: Teachers College, Columbia University, 1948.

平和のための運動の批判的分析を一般市民の立場よりなすこと。

Allport, Gordon W., et al. "Tensions Affecting International Understanding." *American Association of University Professors Bulletin*, XXXIV (Autumn 1948), pp. 546-49.

アルゼンチン・フランス・ブラジル・イギリス・ハンガリー、米国の八教授の定義を掲ぐ。

Arndt, Christian O. and Everett, Samuel. Editors. *Education For a World Society: Promising Practices Today*. New York: Harper and Brothers, 1951.

必読の書 十五人の著者による十六の記事は国際理解教育の全面に涉り多くの示唆を与えている。

Bennett, Wendell C. "Research in Cross-Cultural Education." *Items*, VI (March 1952), pp. 3-6.

留学生問題を論ずる研究。

Blauch, Loyd E. Chairman. "Foreign Educational Aid Programs." *Higher Education*, IX, No. 13 (March 1, 1953), pp. 145-60.

国際理解のための米国政府の種々のプログラムの理解のために書かれた書。

Blegen, Theodore C., at al. *Counseling Foreign Students*. Washington, D.C.: American Council on Education, 1950.

米国立学希望者に一読をすめる。

Chambers, M. M. Editor. *Universities of the World Outside U. S. A.* Washington: American Council on Education, 1950.

世界各国の大学を通じての国際理解をよめる。七十ヶ国の二十の大学に及び、各国毎に簡単にその国の教育制度を論じ、文献を附す。

Cieslak, Edward C. "A study of Administrative and Guidance Practices for Students From Abroad in Representative Collegiate Institutions of the United States." Detroit, Michigan: Wayne University, 1954. Doctoral Dissertation.

米国の百一十二大学に於る三百五十四留学生に於る留学生の校内外生活の調査。

Cook, Paul M. "World Conference of the Teaching Profession." *Phi Delta Kappan*, XXVIII, No. 2 (October, 1946) PP. 77-97.

ハンバートロッチに於る世界教育会議の多角度からの報告。

Crawford, W. Rex, and Cole, Margaret Van B. "Survey of Exchange of Persons: The Present Situation." New York: Social Science Research Council, January 1952. Mimeographed.

人的交流の計画の目的、方法、問題を論じ、研究者のための材料文献を附す。

"Education in other Countries." *Phi Delta Kappan*, XXL, No. (November 1939).

国際權威に於る特集号。

Education in the United Nations. Prepared by members of the International Education Assembly. Washington. 1201 Sixteenth Street, N. W., 1944.

二十六ヶ国に対する十二の教育状態に関する質問の回答を基礎にしている。

Feller, A. H. *United Nations and World Community.* Boston: Little, Brown and Co., 1952.

国連の世界平和に対する貢献を論じ、力ある方法のトビ世界平和を建てるべき論を論ず。

Gardner, John W. "The Foreign Student in America." *Foreign Affairs*, XXX (1951-52), pp. 637-50.

米國留學を希望する者に一読をすすめる。

Carriague, Katharine C. *U.S. Citizens in World Affairs.* New York: Foreign Policy Association, 1953.

四〇〇に及ぶ民間国際組織団体についての知識を与える。

Hackworth, Green H. *Digest of International Law*. Eight Volumes. Washington, D. C.: United States Government Printing Office, 1940.

八巻よりなる大著。国際法の立場から論ぜられる世界平和。

Hans, Nicholas. *Comparative Education: a Study of Educational Factors and Traditions*. London: Routledge and Kegan Paul, Ltd., 1949.

多くの要素が一国の教育体制を造り上げる事を論じ、イングランド、ウェールズ、フランス、米國、ソ聯の教育を比較する。

Institute of International Education. "Special Community Issue." Institute of International Education *News Bulletin*, XXVIII, No. 6 (March 1953).

外国人留学生とそれを迎える社会との交渉から国際理解の教育を論ず。

——. *To Strengthen World Freedom*. Special Publications Series, No. 1. New York: Institute of International Education, 1951.

国際人的交流のための四会議の報告。

——. *Blueprint for Understanding: a Thirty Year Review*. New York: Institute of International Education, 1949.

国際文化交流に於る優秀な個人団体の活動について論ず。

Johnson, F. Ernest. Editor. *World Order: Its Intellectual and Cultural Foundations*. New York: Harper and Bros., 1945. pp. 167-78.

アイザック・エル・カントルの世界の再教育案に対する批判。

Joyce, James Avery. *World in the Making: the Story of International Cooperation*. New York: Henry Schuman, Inc., 1953.

国連の平和計画について論ず。

Kenworthy, Leonard S. *World Horizons for Teachers*. New York: Teachers College, Columbia University, 1953.

世界的な目を教育にもたらす事を刺激し現在行われつつある国際理解のための学校教育を略述しその進歩に対する示唆を附す。

Klinberg, Otto. *Tensions Affecting International Understanding: a Survey of Research*. New York: Social Science

Research Council, 1950.

好著。

Leland, waldo G. *International Cultral Relations*. Denver, Colorado: Social Science Foundation, University Denver, 1943.

此の分野に於る歴史的研究。

Library of Congress: Legislative Reference Service. *Development of the Good Neighbor Policy*. Public Affairs Bulletin No. 37. Washington, D. C.: The Library of Congress, 1945.

フェノス・アイレス会議に至るまでのグエット・ネーバー・ポリシーの発展を述べる。

---, et al. *Handbook for Counselors of Students From Abroad*. Experimental Edition. New York: The National Association of Foreign Student Advisers, 1949.

米国に於る海外留学生の問題とその解決に対する示唆。

McMurray, Ruth E. and Lee Muna. *The Cultral Approach: Another Way in International Relations*. Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1947.

フランス・ドイツ・日本・ソ聯・英国・ラテンアメリカ・米国に於る国際文化関係のプログラムの分析。

Metraux Guy S. *Exchange of Persons: the Evolution of Cross-Cultral Education*. New York: Social Science Research Council, 1952.

人的交流に関する歴史的研究。海外留学生交換に関する必要を説く。

Moehman, Arthur H. and Rouncek, Joseph S. Editors. *Comparative Education*. New York: The Dryden Press, 1952.

参考文献のよき記事を附してゐる。

---. *Education for International Understanding in American Schools: Sugsesions and Recommendations*. Washington, D. C.: The National Education Association of the United States, 1948.

米国の中学校の国際理解に対する責任を力説する。

Northrop, F. S. C. *The Meeting of East and West: an Inquiry Concerning World Understanding*. New York: The

Macmillan Co., 1946.

哲学的研究。

Roosevelt, Eleanor. *India and the Awakening East*. New York: Harper and Bros., 1953.

東洋国家主義とその世界に及ぼす影響について説く。

---, and Dewitt, William S. *UN: Today and Tomorrow*. New York: Harper and Bros., 1953.

国連の現状とその将来性を論ず。

Rossello, P. *Forerunners of the International Bureau of Education*. University of London Institute of Education London: Evans Bros., Ltd., 1944.

教育奉仕の目的のためにつくられた国際組織の歴史的研究。

Schools for a New World. Twenty-Fifth Yearbook, American Association of School Administrators. 1201 Sixteenth Street, N. W., Washington 6, D. C.

必読の書。米国の小中学校に於る世界理解のための教育プログラム。特に生徒の共同研究による活動を記述して多くの示唆を与へる。

Shore, Maurice J. *Soviet Education: Its Psychology and Philosophy*. New York: Philosophical Library, 1947.

ソルキンズム教育の手引。

Smith, Henry Lester. *Comparative Education*. Bloomington, Indiana: University of Indiana Educational Publications, 1941.

英国、仏国、独逸、伊太利、中国、日本、米国の教育の比較。

Stern, Bernhard J. and Smith, Samuel. Editors. *Understanding the Russians*. New York: Barnes and Noble, Inc., 1947.

ソ聯の科学、薬学、芸術、教育に関する権威者による。

Taylor, Lawrence J. "World Peace is Near When School Communities Meet College Foreign Students." *The Nation's Schools*, 43, No. 6 (June 1949), 29-32.

ミシガン州立カレッジに於る海外留学生を毎年一農村に招待する計画の国際理解に及した結果の報告。

United Nations, *Education for International Understanding In The Light of Cultural Differences*, (U. N. Series B, No. 2.

UNESCO, *Implications of International Understanding for Educational Aims*, (UNESCO 1947).

UNESCO. *Some Principles Governing The Teaching of International Understanding*, (UNESCO 1947).

United States Office of Education, Educational Exchange Section. *A Practical Bibliography of Materials Related to: Part I. References on Loans, Fellowships, Scholarships, and the Exchange of Persons Programs; Part II. Materials on Counseling, Guidance, and program Planning for Persons Working With Students, Teachers, Leaders, and Professors From Other Lands*. Washington, D.C.: Federal Security Agency, Office of Education, n. d. Multilithed. 本書に对する説明がなつた研究資料は便利である。

Washburne, Carleton. *The World's Good: Education for World Mindness*. New York: The John Day Co., 1954.

必読の書教師が生徒に国際理解への関心を高むための必要と実地的な示唆を含く含む。

Wilson, Howard E. *Universities and World Affairs*. New York: Carnegie Endowment for International Peace, 1951.

大学の国際理解の途を説く。

2 并つて第三篇(其の二)のたるもの

BOOKS

Cart, William G., *One World In The Making*. New York: Ginn and Co., 1947.

Carskadon, Thomas R. and Modley Rudolf, U. S. A. *Measure Of A Nation*. Twentieth Century Fund. New York: Macmillan Co., 1949.

Emery, Julia, *Background of World Affairs*. Yonkers, New York: World Book Co., 1948.

Heilperin, Michael, *The Trade of Nations*. New York: knopf. 1947. *Historical Statistics of The United States*, 1789-1945. Washington 25, D. C.: Bureau of Census, United States Government Printing Office.

Hoover, Galvin B., *International Trade and Domestic Employment*. New York: McGraw-Hill Book Co., Inc. 1945.

Mason, Edward S., *Controlling World Trade - Cartels And Commodity Agreements*. New York: McGraw-Hill Book Co., 1946.

Moulton, Harold G., *Controlling Factors In Economic Development*. Washington D. C.: The Bookings Institute, 1949.

Packard, L. O., Overston, B., and Wood, B., *Our Air Age World*. New York: Macmillan, 1944.

Wilcox, Clair, *A Charter Of World Trade*. New York: Macmillan, 1949. *The World Almanac And Book of Facts For 1950*. (Harry Hansen, Ed.) New York: New York World Telegram, 125 Barclay Street, New York 15, N. Y.

PAMPHLETS

American International Association For Economic and Social Development. (Mimeographed). Room 5118, 30 Rockefeller Plaza, New York 20, N. Y.

The Annals of the American Academy of Political and Social Science, "Aiding the Underdeveloped Areas Abroad." Hoskins, Halford L., editor, and "The Point Four Program." --- (June and July, 1950) The American Academy of Political and Social Science, Philadelphia.

Committee for Economic Development, *The International Trade Organization and Reconstruction of World Trade*. (June 1949) 444 Madison Avenue, New York 22, N. Y.

Headline Series, Foreign Policy Association, Inc., 22 E. 38th St., New York 16.

No. 18, *Battles Without Bullets* by Thomas Brockway (1939).

No. 59, *The United Nations*, by Allen W. Dulles and Beatrice Lamb (September-October, 1946)

No. 68, *Dollars, Goods and Peace*, by Brooks Emery (October, 1948).

No. 75, *Report on the United Nations*, by Thomas J. Hamilton and Vera Michells Dean (May-June, 1949).

No. 79, *Point Four and the World Economy*, by J. B. Condliffe and Harlod H. Hutcheson (January-Febru-

ary, 1950).

International Reconciliation, Carnegie Endowment for International Peace. New York 27, N. Y.

President Truman's Fourth Pint and the United Nations by Annete B. Fox (June 1949), No. 452.

International Bank For Reconstruction and Development, 1944-1949, by Antonin Basch.

Public Affairs Pamphlets, Public Affairs Committee, 22 E. 38th St. New York 16, N. Y. (20¢ each).

No. 99, *What Foreign Trade Means To You*, by Maxwell S. Stewart (1946).

No. 103, *Cartels Or Free Enterprise?* by Thurman Arnold (1945).

International Basic Economy Corporation by Nelson Rockefeller. March, 1949. Room, 5118. 30 Rockefeller Plaza, New York 20, N. Y.

Senior Scholastic, 7 E. 12th St., New York 3, N. Y.

March 25, 1946, "Will World Trade Bring World Peace?"

October 12, 1949, "Tariff Walls Come Tumbling Down"

November 16, 1949, "Point 4," Special Issue.

United Nations, *For Better Would Trade*, Department of Public Information, United Nations, New York.

-----, *International Cartels*. (A League of Nations Memorandum) 1947. United Nations, New York.

-----, *International Trade Organization: What It Is: What It Does: How It Works*. United Nations, New York.

United States Department of State, Washington, D. C.

Expanding World Trade, U. S. Policy and Program. Office of Public Affairs.

The "Point Four" Program. A Program Report (June, 1949) No. 2.

Twenty-Five Questions and Answers On The Proposed International Trade Organization. (December, 1948).

United States Department of State Publications, Superintendent of Documents. United States Government Print-

ing Office, Washington 25, D. C.

Publication No. 2411, *Proposals For Expansion of World Trade* (November, 1945).

----- No. 3206, *Havana Charter For An International Trade Organization* (March 24, 1948).

----- No. 3243, *International Trade*, Commercial Policy Series 115.

----- No. 3347, *The Point Four Program* (December, 1949).

----- No. 3454, *Worlaid Economic Progress Through Co-Operative Technical Assistance* (April, 1949).

----- No. 3551, *Trading Ideas With The World*. International Educational and Technical Exchange (March 31, 1949).

----- No. 3624, *The United Nations—Four Years of Achievement*. International Organization and Conference Series III, 36 (September, 1949).

----- No. 3712, *Questions and Answers About The United Nations* (January 1950) pp, 18-21.

----- No. 3735, *Patterns of Co-operation*. International Organization and Conference Series I, 9 (1950).

United States Department of State Publications, Superintendent of Documents, United States Government Printing Office, Washington 25, D. C.

Foreign Affairs Outlines, Building The Peace:

No. 7, *The International Trade Organization*. 1946.

No. 17, *The United Nations In Action—The Test of Experience* (1948).

No. 18, *A Charter For World Prosperity - The How And Why of The I. T. O.* (1948).

What The United Nations Is Doing For Better World Trade. Columbia University Press, 2960 Broadway, New York. 15¢.

Kato, Tamio

Education for International Understanding

Résumé

Part I

Principles of Education For International Understanding

There are two important principles of education. One of these is that human behaviour and human learning are organic. There can be no change in any part of this corganic whole without some other part also being changed. Therefore, if the conscious planning for learning is addressed only to acquiring knowledge, the by-product in attitude may be desirable or undesirable, depending on the type of knowledge, the individual's previous disposition, and in part at least the method of teaching. For this reason it is extremely important that the total conception of educational aims regarding international understanding be multidimensional and cover all important dimensions of growth. The second important principle is derived from the necessity of seeing of the component parts of human behaviour clearly enough, so as to provide for educative experiences which aid in the development of all aspects in the most effective way. An educational program which is aimed at promoting different dimensions of growth at the same time must combine in itself learning experiences suitable for development in each of these dimensions. Therefore, the statements of educational aims need to be analytical enough to indicate the desired dimensions of growth. It seems to me that four such dimensions or areas of objectives constitute the essential ingredients of international understanding are :

1
9
1

(1) Knowledge, ideas, concepts, — intellectual awareness. This dimension should be guided by two criteria: (a) Include such cultures or countries as have important relationships with the country to which the young people belong. (b) Include cultures or countries which either contrast with or differ from their own in significant ways.

(2) Attitudes, sensitivities, feelings, — emotional awareness. In this dimension, more attention must be paid to the extension of sympathies and of the capacity to identify one's self with other people with different values and problems.

(3) Objective or critical thinking.—learning skills. In training these skills there are three fundamental aspects: (a) The ability to interpret information for the purposes of deriving generalization from discrete factual data. (b) The ability to apply known facts and generalizations to new situations. (c) Critical reasoning power, which involves evaluating evidence, diagnosing assumptions and differentiating knowledge from fiction and opinion.

(4) The art of group living, group thinking and planning.

Part II

Some Guides For Planning A Curriculum For An International Understanding Educational Program

(1) It is important for young people to develop some fundamental framework of values or moral principles to which to relate the particular problems which they consider.

(2) Knowledge of other nation's achievements and shortcomings, and familiarity with their ways must be supplemented by a sense of relationship to them in their work.

(3) It is important for adolescents to be aware that all cultures and nations are in a process of continual development.

(4) It is important for adolescents to realize the difficulties in the path of achieving international understanding.

(5) It is important to teach about international organizations.

(6) In teaching international understanding, it is important that international relationships and dynamics of these relationships be comprehended.

(7) The total program for international understanding should provide a balanced diet of experiences designed for the four types of objectives suggested in the preceding section.

(8) As the preliminary psychological step towards international understanding, adolescents should be trained to deal with difficulties arising within their customary group of associates.

(9) It is important for adolescents to be trained in self-criticism.

(10) Education for international understanding requires different handling according to the peculiarities of one's own country.

Part III

Two Experimental Course-Of-Studies In International Understanding

(Section 1) An Experimental Course of Study Solely Devoted to International Understanding.

(Section 2) An Experimental Course of Study In International Understanding Education Through The Teaching of World Trade.